

玉川上水通水 370 周年記念

建設産業図書館所蔵

玉川上水 関連資料の紹介

本年は玉川上水が完成し、承応 3 年（1654）に江戸市中への通水が開始されてから 370 周年にあたります。それを記念して当館所蔵の関連資料を紹介します。



玉川上水羽村取水堰

小説



玉川兄弟（文春文庫）

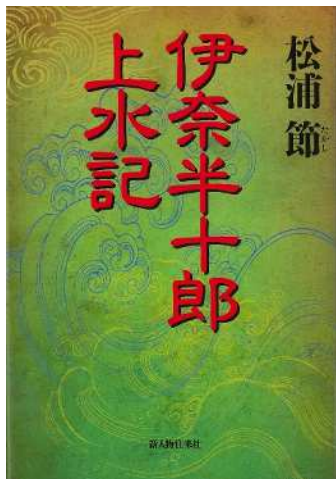
江戸上水ものがたり

杉本苑子（著）／文藝春秋／1994 年

開府以来、急速に発展する江戸の町は、膨れ上がる人口を支えるために、新たな上水道が早急に必要となった。その建設工事を請け負ったのは、庄右衛門と清右衛門という若い兄弟であり、二人は工事を指揮する関東郡代伊奈忠治の知遇を得て、建設工事にまい進する。

しかし、ほとんど平坦な武蔵野台地上を、多摩川上流から江戸まで数十キロの水道を通すという難工事に、兄弟は二度の失敗を余儀なくされる。その責任をとって、伊奈忠治は切腹。庄右衛門兄弟は深い悲しみに暮れ、工事は頓挫するかに思えた。

その時現れたのは、知恵伊豆こと川越藩主松平伊豆守信綱の家臣であり、測量術の達人である安松金右衛門だった。彼の協力のもと、ふたたび難工事に挑む兄弟は、多くの困難と尊い犠牲を乗り越え、ついに羽村から四谷大木戸まで 43 キロの水道を開削し、江戸の町に命の水を導いた。370 年前の玉川上水開削のドラマを鮮やかに描き出した不朽の名作。



伊奈半十郎上水記

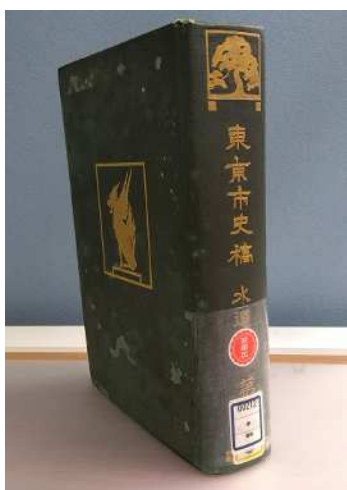
松浦節（著）／新人物往来社／2002 年

前出の『玉川兄弟』の作中では、工事の責任をとって切腹した関東郡代の伊奈忠治。実は切腹はフィクションであり、伊奈家の先祖書では承応 2 年 6 月 27 日に病死と記され、本作ではそれを踏襲している。ちなみに、「郡代」とは広域の幕府領を支配する代官のことをいい、関東郡代は寛政 4 年（1792）に忠尊の代で改易されるまで伊奈家が世襲した。

それはともあれ、本書は忠治の少年時代を描く「丸山陣屋の少年達」、忠治の視点から玉川上水開削工事を見た「伊奈半十郎上水記」という、杉本苑子の『玉川兄弟』とは違った側面を捉えることができる佳作であり、伊奈家最後の関東郡代となった忠尊の「最後の関東郡代」を合わせ三話のオムニバスとなっている。第 26 回歴史文学賞受賞作。



史料



東京市史稿 水道篇（上水篇）第一

東京市（編・刊）／1919 年

『東京市史稿』は、江戸・東京の歴史に関する史料を年代順にまとめたもの。「水道篇第一」には玉川上水開削に関する章が設けられており、その 100 ページから 105 ページに「上水記」が収録されている。

「上水記」は寛政 3 年（1791）に当時の水道局長ともいべき普請奉行上水方道方の石野遠江守広通によって編纂された。この第八巻に玉川兄弟の子孫による書付が収められており、玉川上水は庄右衛門と清右衛門の兄弟によって建設されたという通説はこれによる。

ただし、この書付は玉川上水開削から 60 年以上も経てから書かれており、しかも玉川兄弟の子孫によって、自分たちが水道料金の徴収者である正当性を幕閣に対して説くためのものなので客観性に乏しく、そのまま信頼できる史料とは言い難い。編纂者の石野遠江守ですら、この書付を掲載する一方で第一巻の概説部分に「一説松平伊豆守の臣何某か考ふる所也」と記し、異説（この後『玉川上水の建設者 安松金右衛門』のところで説明する）が存在することを仄めかしている。それはさておき、「上水記」の概要を現代語訳で紹介してみたい。

「玉川上水の開削は 63 年以前の承応元年（1652）に御城内や御城下の水道が不足したので、私たちの親に建設を仰せつけられた。親たちは多摩川上流の羽村より 43 k m ほどの道筋を選び、委細を絵図に書付けて提出したところ、老中の阿部豊後守様を始めとする幕閣の方々が現地を 6 日間視察し、同年 12 月 25 日の御評定で私たちの親に建設を仰せつけられ、費用として 6 千両を下された。翌承応 2 年（1653）年 4 月 4 日より工事にとりかかり、同年 11 月 15 日までに四谷大木戸まで堀渡し、滞りなく通水することができた。（江戸市中への通水開始は承応 3 年（1654））。

しかし、先に下された 6 千両は、高井戸あたりまで掘った段階で尽きてしまい、資金不足を盛んに訴えたが、上水道が完成したら悪いようにはしないので、まずはお前たちの裁量で成し遂げて欲しいと言われた。そうして 2 千両餘を工面し、さらに町屋敷 3 か所を売ってなんとか工事を完成することができた。

親どもはその功勞により、玉川上水御役を永代仰せつけられ、二百石分の扶持をいただき、玉川の名字と帯刀を許された。

しかし、上水の開削で資金を使い果たし、二百石分の扶持では足りず、そのうえ羽村の取水堰の修復などに年々出費がかさむことを申し上げたところ、上水を使用する武家や町方から水道料金を徴収することが許された。

ところが、その後、半分の水道料金で役目を替わりたいというものが現れたので、建設の経緯を述べて他の者の出る幕ではないことを訴えたところ、ご理解いただ

いたが当分の間は元の三分の二の料金で勤めるようにと申し渡され、迷惑している。」

その後、兄弟の子孫は賄賂を受け取り、水量や工事のさじ加減をしていると噂をたてられ、役目を取り上げられてしまうのだが、上記の書付からもにじみ出ているとおり、既得権益は人を欲深くし、さらには心を狂わせてしまうのかもしれない。

それはさておき、本書には「上水記」のほか、関東郡代・伊奈家代々の先祖書も採録されており、玉川上水に関する基礎資料として見逃すことができないものである。

論考



玉川上水論集 I

羽村町史史料集第八集

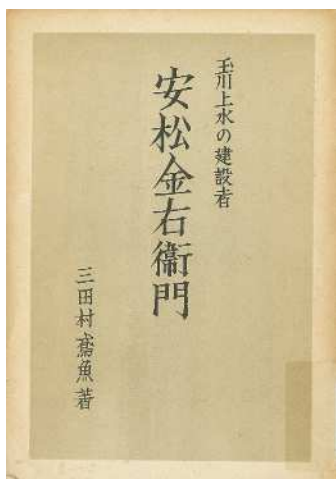
羽村町教育委員会（編・刊）／1982 年

玉川上水の取水口がある羽村町が刊行した論考シリーズの第 8 集。玉川上水に関する基本的、代表的な研究論文を収録したもの。

総論としては、「江戸の上水」（堀越正雄）、「玉川上水の沿革」（鷹見安二郎）、「江戸の水道制度」（伊藤好一）があり、江戸の上水道および玉川上水の概説を俯瞰できる。

各論は地理的状況を論ずる「玉川上水と武蔵野台地」（竹内常行）、「玉川上水とその分水」（矢嶋仁吉）。玉川兄弟の出自を探る「玉川上水道兄弟の出生地について」（稲村坦元）などが収録されている。

坂上洋之の「玉川上水考」には、『東京市史稿 水道篇 第一』の項で紹介した「上水記」の内容解説と、子孫たちの顛末が簡潔に説明されているので、併せて読んでいただきたい。



玉川上水の建設者 安松金右衛門

三田村鳶魚（著）／電通出版部／1942 年

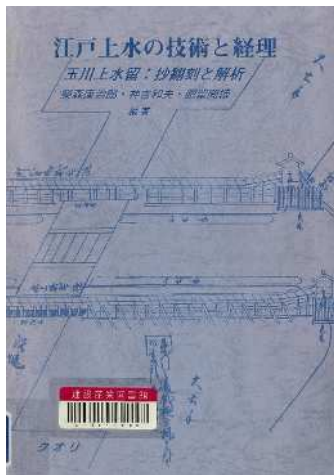
玉川上水の開削は、庄右衛門と清右衛門の玉川兄弟によって成し遂げられたというのが通説だが、一方では玉川兄弟は2度も工事に失敗し、3度目に玉川上水総奉行を務めた松平伊豆守信綱の家臣である安松金右衛門の計画によって、ようやく成功したとする説がある。

これは昭和9年（1934）に江戸研究家の三田村鳶魚が紹介した「玉川上水起元並野火留分水口之訳書」（以下、玉川上水起元）によるもので、通説と相反するものとして議論の対象となっている。

「玉川上水起元」によれば、玉川兄弟は現在の羽村取水堰より約15km下流の府中用水取水口（東京都国立市）から多摩川の水を引き入れる計画を立てたが、水が流れなくなり失敗したとある。この水が流れなくなった場所が、東郷寺門前（東京都府中市）の小さな坂だといい、地元では字（あざな）の金尻（かなしり）を振って「悲しい坂」と呼ぶようになったと伝えられる。

さて、この失敗により今度は取水口を更に上流へと移し、羽村取水堰から2kmほど下った福生村地内（東京都福生市）の多摩川河畔から四谷大木戸までの上水堀を完成させた。しかし、いざ通水したところ熊川村地内（福生市熊川）で水が残らず地中に吸い込まれ、その先へは全く流れなくなった。その為、この土地は水喰土（みずくらいど）と呼ばれるようになり、現在でも失敗した玉川上水の堀跡と伝えられる窪みが、拝島駅北西のJR青梅線とJR八高線に挟まれた「みずくらいど公園」内に残っている。水喰土については文献による研究だけではなく、地質学的にも調査が行われたが真偽の確証は得られていない。

本書は、このような「玉川上水起元」の記述をもとに、鳶魚流の解釈で安松金右衛門こそ真の玉川上水開削者であることを、一般向けに縷々述べたものである。



江戸上水の技術と経理

玉川上水留：抄翻刻と解析

榮森康治郎 等（編著）／クオリ／2000 年

本書では、江戸時代後期の玉川上水の工事記録である「玉川上水留」を基礎資料として、玉川上水の維持管理がどのように行われたかを解明し、さらに玉川上水が江戸の環境浄化・美観形成に果たした役割を維持管理技術との関連で明らかにすることを目的とする。

「玉川上水留」は、国会図書館に所蔵される全 119 分冊からなる史料であり、玉川上水が創設されてから約 180 年後の天保 4 年（1833）から明治 3 年までの工事・維持管理などの記録である。

第 2 章の肥留間博の「玉川上水留」および「神田上水留」の史料解説では、全冊の目録を。また巻末には抜粋した 5 件（1 件の史料が、国会図書館では分冊されており、その冊数でいえば 17 冊分にあたる）の翻刻も掲載している。



玉川上水論集 II

羽村市史料集八

羽村市郷土博物館（編・刊）／2003 年

『玉川上水論集 I』が発行された後に発表された論文を収録した続刊。玉川兄弟の子孫が書き上げた『上水記』および、玉川兄弟ではなく安松金右衛門こそ真の玉川上水開削者とする『玉川上水紀元』という相反する内容の史料の解題「上水記ノート」「玉川上水紀元再見」（保坂芳春）。『江戸上水の技術と経理』の編著者である神吉和夫と榮森康治郎の玉川上水の構造と設計および維持管理体制と経理に関する論考などからなる。



基礎資料



新多摩川誌 全7巻

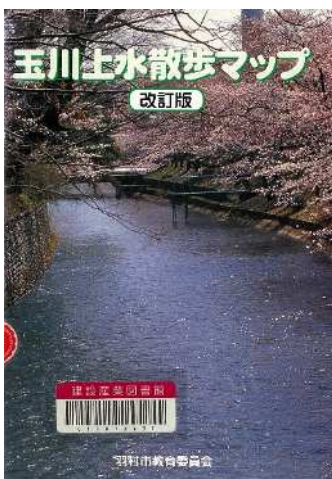
新多摩川誌編集委員会（編著）／河川環境管理財団／2001年

1986年に刊行された『多摩川誌』（全5巻）の増補改訂版。本編（上・中・下）、写真・図集、統計・資料、文献・目録、年表、および別巻として手軽に多摩川に関する概要をつかめる『超要約 新多摩川誌』の全7冊からなる。

玉川上水の水源となった多摩川の自然、治水、利水、川の空間利用、社会生活史、民俗、流域の経済と都市化、河川環境、21世紀の課題ごとに記述する基本資料である。



歩いてみよう



玉川上水散歩マップ（改訂版）

羽村市郷土博物館（編）／羽村市教育委員会／2002年

玉川上水を歩いてみよう。上水の沿線には、歴史や自然が満ち溢れている。取水堰がある羽村には、特殊な形に掘られた五ノ神マイマイズの井戸が。また、羽村取水堰付近には玉川兄弟の銅像があり、桜の季節には桜まつりが開催される。

取水堰から下流へ歩くと、JR 拝島駅手前には玉川上水掘削の2度目の失敗の原因となったと伝わる「みずくらいど公園」がある。

ここで拝島駅から帰宅するのもいいが、玉川上水を少し外れて「福生のビール小屋」に寄ってみるのもいい。石川酒造のクラフトビールとつまみにピッタリのイタリア料理がたのしめ、店舗内の敷地には小さな流れがあり、時には鮎が泳ぐ姿を見ることができる。

ビールで英気を養い、さらに進むと西武鉄道の玉川上水駅を過ぎたあたりに小平監視所がある。実は上水道としての玉川上水は、昭和40年にここまでで役目を終えており、これより下流は昭和61年の清流復活事業によって高度処理水が流されている。

まだ歩けるなら都立小金井公園まで行ってみよう。園内の「江戸東京たてもの園」には歴史的に価値が高いとされた建築物が移築保存されており、江戸時代の農家はもとより、著名な建築家・前川國男の自邸などをみることができる。

さて、取水堰から小金井公園までざっと見どころを紹介したが、ここまでの上水沿線は、かつての武蔵野を彷彿とさせる雑木が植えられ、季節の花や動物、運がよければ清流の宝石とよばれるカワセミを見ることがもできる。地図を片手にぜひ歩いてみて欲しい。